2. ヒト消化器癌組織中エストロゲンレセプター測定に関する検討

大浪　俊平　黒田　環（産業医大・放部）
塩崎　宏　中田　肇（同・放）
膳所富士男（同・一外）

近年，各種の消化器癌に ^{3}H 標識エストラジオール (^{3}H-E$_2$) 結合活性の存在することが報告されている．しかし ^{3}H-E$_2$ を用いた binding assay 法 (DCC 法) ではエストロゲンレセプター (ER) 以外の非特異的蛋白質の干渉を ER と誤認してしまう可能性のあることも指摘されている．今回，ヒト胃癌，肝癌，胆のう癌組織中の ER を ER に対するモノクローナル抗体を用いた EIA で測定し，^{3}H-E$_2$ を用いる DCC 法による測定値と比較検討した．

3. ^{131}I-MIBG シンチグラフィで転移巣の発見された悪性褐色細胞腫の1例

下園美千子　中條　政敬　島田受理夫（国療南九州病院・放）
加治屋芳樹　小山　隆夫　篠原　慎治（鹿児島大・放）
渡辺　昭彦（同・一外）

^{131}I-MIBG シンチグラフィは褐色細胞腫の局在診断に優れた検査法とされている．今回，本シンチグラフィが褐色細胞腫の転移巣の発見に有用であった症例を経験したので報告した．症例は49歳女性，主訴は高血圧と背部痛で，外来時 CT で右副腎部と右傍大動脈領域に腫瘤を認めた．ホルモン学的に褐色細胞腫と診断し，^{131}I-MIBG シンチグラフィを施行したところ上記部位のほかに頸部と縦隔に異常集積を認め，CT, MRI にて甲状腺左葉後方と縦隔部位に腫瘤を確認し，悪性褐色細胞腫の転移と診断した．手術では，右副腎と傍大動脈腫瘤を摘出したが，病理診断にてリンパ節転移を伴う右副腎褐色細胞腫であった．

4. ^{99m}Tc-DTPA, ^{99m}Tc-DMSA が集積した uterine myoma の1症例

米倉　隆治　阿辺山和浩　島袋　国定
篠原　慎治（鹿児島大・放）
中村　純雄　禧久　豊嗣（同・放部）
中山　哲規　大井　好忠（同・泌）

^{99m}Tc-DTPA, ^{99m}Tc-DMSA は腎シンチグラム，レノグラムに使用され，腎機能，形態の評価に用いられている．そのうち ^{99m}Tc-DTPA は尿路系以外の組織に集積することは neurofibroma をはじめとする腫瘍，炎症，妊娠に集積したという報告例はあるものの，比較的稀とされている．そのうち uterine myoma への集積は5例の症例報告がみられるのみである．今回われわれは ^{99m}Tc-DTPA のみでなく，^{99m}Tc-DMSA でも集積が認められた uterine myoma の1症例を経験したので，若干の文献的考察を加えて報告した．

5. 骨原発悪性腫瘍の術後経過観察における骨シンチグラフィについて

前岡　伸彦　塩崎　宏　中田　肇（産業医大・放）

骨シンチは骨病変の検索には欠かせない検査法である．今回われわれは，骨原発悪性腫瘍の術後12症例に対し，^{99m}Tc-MDP を用いた骨シンチを計64検査施行し，その経時的変化について検討を加え若干の知見を得た．つまり，1) 術後断端・残存肢の集積亢進は徐々に消失していくが，その間，局所再発，転移との鑑別には注意深い経過観察が必要である．2) 骨転移の検出には骨シンチが鋭敏であるが，遠隔転移の検出には CT・X 線検査との併用が必要である．3) 骨シンチ陽性例は転移巣に石灰化を有し，血中 ALP 高値の症例が多い．このように，骨シンチは患肢の術後経過をみる上で意義あるものと考えられ，また局所再発，転移病巣の検出にも他の検査と併せて，まず第1に施行すべき検査と思われた．

Presented by Medical*Online